



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソシュールの言語理論に関する若干の考察 : 「変形文法」理論との関連で
Author(s)	田中, 利光
Citation	北海道大学人文科学論集, 8, 92-69
Issue Date	1971-05-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34296
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_PL92-69.pdf



ソシュールの言語理論に関する若干の考察

——「変形文法」理論との関連で——

田 中 利 光

I

Syntactic Structures, The Hague 1957 によって一般にひろく知られるようになり、以来我々に大きな影響をおよぼしつつ展開されている N. Chomsky の「変形文法」理論が、ソシュールの言語理論と、いくつかの、しかも重要な点においてかかわりを持っていることは、その後の Chomsky の論文によって明らかなるところである。たとえば彼は言語 (language) という複雑な事象の研究に際し、根本的に重要なこととして competence と performance とを区別する (Aspects of the Theory of Syntax, Cambridge 1965, p. 3 以下参照)。この区別がソシュールの langue と parole との区別にかかわりを持っていることは彼自身の明言しているところである (Aspects, p. 4)。しかしソシュールが「langage の呈する事象総体の中に langue と parole との、二つの因子をまず識別した」(Cours de linguistique générale, Paris [1916] 1955⁵, p. 112) ことがソシュールの言語理論においてきわめて重要であるのみならず、言語の研究方法史上の劃期的な事柄であったのは周知の事実だといつてよい。

ところで、Chomsky はこのように区別したあとで、しかしながらソシュールの langue の概念は単に項目の体系的な目録にすぎないとして、これを退け、langue ないし competence をどう理解するかという点では、むしろこれを生成の諸過程の体系にとらえたフンボルトに帰らなければならない、と説いている (Aspects, p. 4)。このこともソシュールの言語理論との重要なかわりといえよう。そして、もし私の理解に誤りがないとすれば、これがソシュールの言語理論に対して Chomsky がとっている基本的な態度であって、機に応じてこの基本テーマが現われてくるのである。たとえば Current Issues

in Linguistic Theory, 1964 (The Structure of Language, ed. Fodor/Katz, pp. 50-118) にはこのテーマがもうすこしくわしく展開されている。すなわち、ここでもこの competence の中身を「文法」ないし「生成文法」(generative grammar) とでも名付けらるべき諸規則の体系にとらえ、ソシュールの用語をもってすれば、これこそ langue と名付けうるものの内容である、とする。そして langue 研究こそ他に優先しなくてはならないとしたソシュールの仮定の正当性を承認している (Current, pp. 51-52)。

しかるにこの langue, competence, generative grammar をどう理論的に把握するかに関しては Chomsky の提起する transformational model に対立するもうひとつの model があるという。Chomsky はこれを taxonomic model と呼び、ソシュールなどを祖とする modern structural linguistics にじかに由来するものなのに対し、前者はむしろ、traditional grammar にはるかに近い [modern structural linguistics に近いよりも]、というのである (Current, pp. 52-53)。

そして、ソシュールは基本的には langue をそれぞれ文法上の特性をそなえた記号の集合、すなわち単語のような要素、成句、それに多分、ある限られた句型の集合と見なしている。そこで、ソシュールは、文形成の基底に繰りかえしあらわれると認められるような諸過程を問題として、これにとりくむことは全くできなかつたし、文形成を langue の問題としてよりも parole の問題、体系的な規則の問題としてよりも自由で任意な創造の問題として見ているようである。普通に日常、言語を使用する際に認められるような「規則に支配された創造性」のための場所は彼の体系には全くない——このように Chomsky はソシュールを理解している (Current, pp. 59-60)。

そして、ソシュールなどを祖とする modern (structural) linguistics は、このように langue を要素の目録と考え、伝統文法ならびにフンボルトの一般言語学の関心の焦点となっていた規則の体系よりもむしろ要素の体系に気持を奪われていたソシュールの影響を非常に受けている。一般的に、言語の「創造的な」面に関心をむけて、これを記述しようとはほとんどしない。つ

まり、任意の発話に構造上の記述を指定するような、つまりこのようにして話し手がその言語に関して有する能力と知識を具体化しているような、生成上の諸規則の体系をどう提示したらよいか、という問題に立ち向わない。更に、伝統文法と比べて、このように関心の幅をせばめた結果、要素の目録さえも、これを正しく選択することができなくなっている。なぜなら、いかなる目録も(音素のそれといえども)文がその言語において形成される諸原理にかかわりなく決定することはできないように見えるからである(Current, p. 60), として, modern structural linguistics における, [Chomsky のいわゆる]このような動向の原因をソシュールに帰している(Current, p. 113 も参照)。

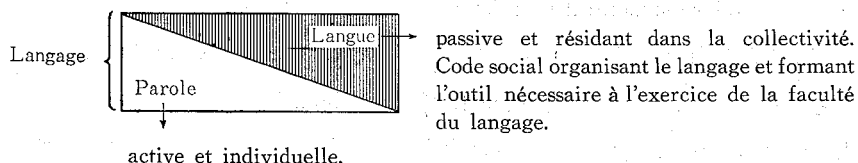
ところで、ソシュールの langue に関する Chomsky のこのような理解は正しいであろうか。ソシュールの誤読はないだろうか。また competence-performance の区別は langue-parole の区別に関係しているわけであるが、どのように関係しているのだろうか。小論では、この二点を軸にしてソシュールの言語理論に関して若干の考察をしてみたいと思う。もっとも、私はここでソシュールのための apologia を書こうというつもりなのではない。そういう関心・興味は全くないし、またその能力・資格にも欠けていることはよく自覚しているところである。そうではなくて、言語理論の学説史に関して私なりに理解を深めたい、と同時に、言語研究史におけるいわば巨峰ともいうべき人達の学説をより正しく学び且つ位置づけることを通して「言語」という事柄そのものに関して私なりに理解を深めたいのである。

II

まずはじめに、Chomsky の competence と performance という概念にそれぞれかわりのある langue と parole の区別について問題にすることにしよう。くりかえしていることになるが、ソシュールが langage と呼んだ事象総体の中に二つの因子を識別して、それぞれを langue, parole と名付けたことは言語研究の方法上、きわめて射程の大きい、示唆に富むことだったといえよう。ところが langue, parole とソシュールの名付けた事実はなにかと

なるとかならずしも明確ではなく、ソシュールの分析自体、いまだ精密を欠くのではないか、という指摘もなされている(たとえば服部四郎「ソシュールの langue と言語過程説」『言語学の方法』1960, pp. 166-218 を参照)。

さて、R. Godel, *Les sources manuscrites du cours de linguistique générale*, Genève-Paris 1957, p. 153 によると、1911 年 4 月 28 日(「講義」はこの年の 7 月 4 日で終わった)の講義の冒頭で parole と langue の区別に関して次のような図式と説明をソシュールはしたという。



1. Usage des facultés en général (phonation etc.);
2. Usage individuel du code de langue selon la pensée individuelle.

Langue → 受動的で共有されている。langue を組織化し langue の能力の行使に必要な道具となる社会的な code.

Parole → 能動的で個人的。

1. 一般的な諸能力の使用(発声など)
2. 個人的な考えによる langue という code の個人的な使用。

そして Cours pp. 30-31 の「langue を parole から別つことによって同時に 1. 社会的なものを個人的なものから、2. 本質的なものを付属的で多少とも偶有的なものから別つことになる。——中略——parole は意志と知能の個人的な行為である。その中に次の二つを識別するのが適当である。1. 話手とその個人的な考えを表現するために langue という code を利用する時の結合、2. この結合を外に知らせることを可能にする心的・物理的なメカニズム」などとまとめられている部分は、その頃の学生の講義ノートをひとつの source としているという (Godel, *Sources*, p. 103). Cours p. 31 に parole の中身としていわれているものは、いいかえれば発話されるべき内容と、この内容を形成し、これを外にあらわす心的な活動、ならびに生理的な活動のことと理解されよう。Le mécanisme psycho-physique となっていて psycho-physiologique となっていない点は一すふにおちないが、「生理的な活動」が

含まれていることはまず問題がないと思う。上に引用したように *source* に *usage des facultés en général* (*phonation* etc.) [下線——引用者] となっているからである。これらの活動の結果生じた音声は *parole* に含まれているのか、かならずしも明らかでない (服部『方法』p. 183) が、1911年5月1日(?)の学生の講義ノートによると *parole* が *somme de ce que les gens disent* : a) *combinaisons individuelles* (*phrases*), *dépendant de la volonté de l'individu* ; b) *actes de phonation, exécution de ces combinaisons, également volontaires* と記されている、という (Godel, *Sources* p. 271. p. 85)。このような表現ならびに *cours* pp. 27-32, その他でのべられているところを総合的に考えると, *procès purement physique*, *les parties physiques* (*ondes sonores*), *une partie extérieure* (*vibration des sons allant de la bouche à l'oreille*) (*Cours* pp.28-29) つまり、発話の結果生じた音声は *parole* の中に当然含まれているとしなくてはならないだろう。上に問題にした *le mécanisme psycho-physique* [下線——引用者] という表現もそのことを示しているといえよう。

ところで、*parole* の内容をこのようにたどってくると、ここで当然、発話の結果生じた音声の刺激を受けて、話手の発話の内容を理解するという個人的な行為はソーシャルにおいてどのように分類されているのか、という疑問にぶつかる。しかしこの点については次のように指摘されている。「表現に相対する聴くこと、そして解釈することについては——中略——〔話線〕回路〔全体〕に注意をうながしていながら、これを *parole* に割りふるかどうかという点になると、〔回路のうちの〕《能動的な》、《遂行的な部分》しか彼が考慮しなかったことはたしかに事実だ」(Godel, *Sources*, p. 151 その他に同書 p. 151 の脚注 74, 服部『方法』p. 217 などを参照)。たしかに話し手のように *combinaisons individuelles* を聞き手は行わない。これに相応ずるのである。その意味では《active》ではない。また発話とは異って諒解は集団によってもなされる。その意味では《individuelle》ではない (*Cours* p. 30 の「遂行は集団によつては決してなされない。それは常に個人的である」を比較参照。しかし、「遂行」は「常に個人的である」というが、「異口同音に同じことをいう」ような現象もあることに

注意する必要もあろう)。しかし、伝達の困難、誤解・曲解などという現象に注意するだけでも、諒解活動の個人性は明瞭である。ソシユールの口吻をまねていえば、「話し手の考えを理解するために *langue* という *code* を聞き手が利用する」というように諒解活動を把握することもできよう。この意味では諒解活動の能動性も明瞭である。ところで発話活動の *individualité*・*activité* と諒解活動の個人性・能動性との間に、事柄そのものに則して先々は問題にしなければならない区別があるとしても、まず分離・区別すべき根拠は認められないであろう。「ソシユールに対して我々が、非難しうことは *parole* の彼の最後の定義 [*active et individuelle* ?——引用者] から一切の結論を引きださなかった (しかし彼にはそのための時間が許されていたろうか) ことである」(Godel, *Sources*, p. 159) という。とすれば、*parole* の中に「話し手の考えを理解する目的で、*langue* という *code* を個人的に使用すること」「*Usage individuelle du code de langue en vue de comprendre la pensée du sujet parlant*」を含めることは事柄そのものにより則していると同時に、ソシユールのねらいに沿っていることでもないであろうか。この点で、ソシユールの *parole* の概念に対応する Chomsky の *performance* の概念はどうなっているであろうか。彼は *competence* を *the speaker-hearer's knowledge of his language* とパラフレーズしたのに対して、*performance* を *the actual use of language in concrete situations* (*Aspects*, p. 4) とパラフレーズしている。これだけの表現、ないしそれにつづいて *performance* に関してなされている「A record of natural speech will show numerous false starts, deviations from rules, changes of plan in midcourse, and so on.」〔下線——引用者〕のような記述だけだと、あるいは *hearer* (*listener*) の活動に関してはソシユールと同様に、*performance* の内容としてはっきり意図されていないのではないか、という疑いも一応可能であるが、次のような表現を読むと、そうした疑念は一掃されるといってよい。すなわち、「*Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech-community, who knows its language perfectly and is unaffected by*

such grammatically irrelevant conditions as memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, and errors (random or characteristic) in applying his knowledge of the language in actual performance" (Aspects. p. 3), あるいは, "the underlying system of rules that has been mastered by the speaker-hearer and that he puts to use in actual performance." (Aspects. p. 4), あるいは, "A fully adequate grammar must assign to each of an infinite range of sentences a structural description indicating how this sentence is understood by the ideal speaker-hearer" (Aspects. pp. 4-5) 等の表現は, speaker の発話活動のみならず hearer (listener) の活動も performance の中に含まれていることをはっきり示している, と私は思う. まずこの点に関していえば, Chomsky の competence-performance はソシュールの langue-parole に呼応しつつ, しかも後者のもつ不明瞭・不整合を克服している, といえよう.

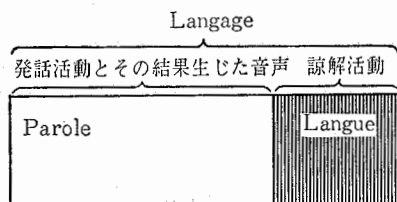
ちなみに, このような差は, parole と performance という両者によって選択された術語の中にも反映しているといえるかもしれない. というのは「我々は事柄を定義したのであって, 単語を定義したのではない, ということに注意しなければならない. ——中略——いかなる単語〔の概念〕も今はっきりさせた概念にしっかりとあわない. ——中略——事柄を定義するのに単語から出発するのはまずいやり方である」(Cours, p. 31) というすぐれた注意をソシュールはしているわけであるが, そして, 普通の用法では諒解活動を意味しない parole という単語をそれにもかかわる術語として用いることは一応差支えないであろうが, この場合はむしろ, 諒解活動という chose に関するソシュールの認識が欠落ないし明確になっていないことを示しているかもしれないからである. また, 普通の用法では諒解活動に関しても用いると思われる exécution, exécutif という単語を, もっぱら発話活動との関連でのみソシュールは制限して用いている (たとえば Cours, p. 30) が, Chomsky は parole にかかわりのある概念をあらわすために performance (exécution) をもってし, speech (parole) という術語をあえてとらなかったらしいからで

ある。またソシュールが“C'est par le fonctionnement des facultés réceptive et coordinative que se forment chez les sujets parlants des empreintes qui arrivent à être sensiblement les mêmes chez tous.” (Cours, p. 30)「話し手たちの中で、印象が形成されて、それがうまくすべての人においてまず同一である、というようになるのは受容且つ調整の諸能力の働きによる」のように「聞き手」についても *sujet parlant* 《話し手》という術語を用いているのに対して、Chomsky が *performance* について、くどいほど *speaker-hearer* (あるいは *listener*) と表現している点も比較参照されたい。

さてところで、以上のようにすれば、つまり発話活動、その結果生じた音声に諒解活動をも含めてこれらを *parole* ないし *performance* として分類すれば、「*parole* の彼の最後の定義から一切の結論を」引きだしたことになるだろうか。ここであらためて、*parole* ないし *performance* として一括されたものを、ソシュールの *langue* → *passive et résidant dans la collectivité*, *parole* → *active et individuelle* という定義 (Godel, Sources, p. 153) や「*langage* は個人的な面と社会的な面を有している」(Cours, p. 24) という言説と照らしあわせながら考えてみると、実は「個人的な」(a) ものとして一括したこれらの中に、更に「個人的な」(b) 面と「社会的な」面とを認めないわけにはいかないであろう。たとえば発話の結果生じた音声の中に、*langue* という *code* に応ずる刻印が押されていないならば、すなわちその意味での「社会的な」面がなく、全く「個人的な」(b) 面しかないとすれば、原則として *communication* は不可能になろう。そして、「個人的な」(a) ものとして一括されたものの中で、この二つの面の一方をぬきにして他方を考えることはできない (“*l'on ne peut concevoir l'un sans l'autre.*” Cours, p. 24) であろう。これはあまりにも当然であり、明白なことである。とするとどうなるのだろうか。ソシュールは直観的に *langage* の中に二つの因子が識別できるし、しなくてはならないことを洞察しつつも、実際の定式化においては「個人的な」(b) 面のつもりで「個人的な」(a) ものをいっているとすれば、ここでもなお「*parole* の彼の最後の定義から一切の結論を」引きだしていないことになるだろう。そし

て、以上見てきたような、parole の概念をめぐる不明瞭・不整合とびったり相呼応するような不明瞭・不整合が、以下に見るようにソシュールの langue の概念をめぐっても認められることはまことに興味深い。

上に、1911 年 4 月 28 日の講義の冒頭でソシュールの示した図式と説明を引用したが、その前の 4 月 25 日の講義では、学生のノートによると langue の色々な領域の中で langue が占める場所を問題としてとりあげ、langue は話線回路の心的な部分の中で、受容的且つ調整的な部分と符合する、とソシュールはいっている (Godel, Sources p. 82). そして「[langue は] これを〔話線〕回路の一定部分に、すなわち聴覚映像が概念と連合するにいたる場所にそのありかを見つけることができる」(Cours, p.31) とまとめられている部分のひとつの source はその頃の学生のノートだという (Godel, Sources p. 103). 上に parole の中に諒解活動が含まれていないことを問題にしたが、実は諒解活動がここに姿をあらわしているのである。そして、この部分をそのまま読むと、まるで、諒解活動をまるごと langue であるとソシュールが考えていたかのような思いにとらわれる。もしそうだとすれば、あまりにも奇怪な事実認識だとしなくてはならない。つまりソシュールは図式で示すと、



のように考えていた、ととられかねないような表現がかなり目立つのである。そしてソシュールは、心的な聴覚映像が心的な概念に連合する連合、しかも集団の同意によって是認された連合の総体が langue を構成している（“les associations ratifiées par le consentement collectif, et dont l'ensemble constitue la langue” Cours, p. 32）とのべているわけであるが、これを読むと、心的な聴覚映像、心的な概念、またその連合は、そのまままるごと「集団の同意によって是認された」面しか、つまり「社会的な」面しかないと考えているかのよ

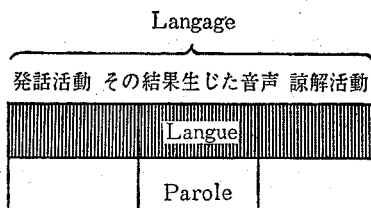
うである。しかしそのような考えが事柄そのものに則していないことについて、もはやくどくどうする必要はないと思う。もし、心的な聴覚映像、概念、その連合の「社会的な」面のみを *langue* といっているのだとすれば、それらの「個人的な」面は、ソシュールの視野からは正当な理由なく欠落している、ということになろう。そしてこのような *langue* をめぐる不明瞭・不整合は先に考えた *parole* をめぐるそれとびったり符節している。とすれば、諒解活動においてのみならず、発話活動とその結果生じた音声においても「社会的な面」(*un côté social*) を、また発話活動とその結果生じた音声においてのみならず諒解活動においても「個人的な面」(*un côté individuel*) を識別することこそ、事柄により則していると同時に、またソシュールのねらいでもなかったのであろうか。あえてこれを図示すれば、

図 1 言語の構成

図 2 言語の構成

図 3 言語の構成

図 4 言語の構成



のようになろうか。そしてすでに引用した 4 月 28 日の図式は、上のような定式化への方向を暗示しているのではないであろうか。

註——ソシュールは *langue* に関して、「一種の平均」(*une sorte de moyenne*) といい、また「多分精密にというのではないが、しかし近似的に [同じ]」(*non exactement sans doute, mais approximativement*) というようにもいっている (Cours, p. 29). また *langue* の存在様式を $1+1+1+1\cdots=I$ (集団のモデル) という公式で表現することができとしている (Cours, p. 38). これは、彼がいわゆる *langue* としたものの中に本当は *côté individuel* を識別していたことを暗示している、ともいえよう。

ここで *langue-parole* にかかわりがあるという Chomsky の *competence-performance* についてふたたび考えてみることにしよう。Chomsky の *competence* なる概念は彼自身の説明によればすでに引用したように the speaker-hearer's knowledge of his language である。いわば、実際に行われる発話活動・諒解活動、すなわち *performance (exécution)* を司さどる。これらの

背後に当然予想される・具体的な performance につきることなく、かえってその源泉になっている可能態といってもよいであろう。それならばこの competence はソシュールの langue とどのようにかかわっているのであろうか。いままで論考の都合上、具体的な発話活動・その結果生じた音声・諒解活動にしか言及しなかったけれど、実はソシュールの langue の概念はよりすぐれて、これらの活動の可能態にかかわるものである。すでに考えたように、諒解活動との関係はあいまいであるが、具体的な発話活動・その結果生じた音声を「個人的」として、これに相対立するような表現をソシュールは langue について行い、そのあり場所を個人の「脳中」に規定しているからである。1906-1907 年に行われた第 1 回の講義では、学生のノートによると「個人の脳中に含まれているところの全体、聞かれ且つ口にだしていわれる諸形態とそれらの意味とのたくわえ、これが langue である」と規定されている。また一方、「談話の必要によって、特別な操作によって口先に出されるところの全体、これが parole である」(Godel, Sources, p. 145)。また次のようにもいわれている、「もし我々がすべての個人のうちに貯えられている言葉の映像の全体を把握することができるならば、langue を構成する社会的なきずなにもふれることになる。これは——中略——個人の脳中に潜在的に存在している文法的な〔言語的な一訳者〕体系である」(Cours, p. 30)。また parole について「それは人々が話すところのものの総体である」(Cours, p. 38)。このような langue, parole の概念規定が、諒解活動についての不明瞭さが解消された形で、Chomsky の competence, performance に一応対応していることは明白である。

ところで、このような識別は事象そのものに則した、正しい・必要なものであろう。ところがソシュールの場合、parole [performance] で意味されている事象は、更に「個人的な面」(côté individuel) という概念で一括され、「社会的な面」(côté social)として規定された langue と対立せしめられてもいるのである。「個人的な面」と「社会的な面」などと、その対立を表現することは一応さしつかえない。しかし parole [performance] の中に langue

〔competence〕にいろいろな程度において呼応する面が個人的な面と相混じっているという事実があり、それらを識別することも重要である（可能態と現実態の識別と密接な関係にもある）以上、ソシュールの定式化は不明瞭、不整合であるとして、すでに我々が行ったような定式化をし、またそれがソシュールのねらいでもなかったかと考えたわけであった。それに対して Chomsky の performance は、そのまま全体が「個人的な面」とか「付带的で多少とも偶有的なもの」(ce qui est accessoire et plus ou moins accidentel) (Cours, p. 30) というような規定を当然のことながらうけていない。この点でもソシュールの不明瞭さが克服されている。そして、performance の中に、memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, errors 等々の跡と、the underlying system of rules を反映している面とを識別していくのである (Aspects, pp. 3-4)。つまり performance ならびにその data の中に、「個人的な面」と、competence をいろいろな程度に反映している面とを識別しつつ、competence の全体を把握することを言語学者の課題とするのである (Aspects, p. 4)。ところで performance を司どる、潜在的な言語能力の総体を考えてみた場合、当然ここにも「社会的な面」と「そうでない面」とを識別しなくてはならないであろう。parole [performance] についてはソシュールは不明瞭であったが、この点については、より明瞭であるように思われる。というのは、ソシュールは「langage の能力は langue とは別の事実である。しかし、それ [langue] なくしては行使されえない」(Godel, Sources, p. 148) といっているからである。つまり今、私が「潜在的な言語能力の総体」によって意味している事象を faculté du langage と langue とに分析しているようだからである。この点で、Chomsky の competence はどうであろうか。ソシュールが faculté du langage ならびに langue と呼んでいるものをあわせて competence といっていないであろうか。この点は、たとえば言語習得に関して、「変形文法」理論が主張する理性論 (Rationalism) を考えてみても、はたしてソシュールの langue と Chomsky の competence とが同一の事象を意味しているのかどうか用心してかからなければならないと思う。無論、

performance を司る「潜在的な言語能力の総体」をソシユールのように *faculté du langage* と *langue* に分析することがはたして正しいかどうか、かりに正しいとしても、そのかわりあいとどう理解するかなどは、なお問題としてのこるであろう。また私は、「潜在的な言語能力の総体」に「社会的な面」とそうでない面とを識別する、といって、「個人的な面」とはいわなかった。「個人的な面」があることは無論だとしても「普遍的な面」(*côté général*)とでも呼ぶべき事実が更に含まれていることは明らかだからである。このように考えてくると、具体的な発話活動・その結果生じた音声・諒解活動に関しても、「社会的な面」と「個人的な面」という二つの因子よりも、そのどちらかに、あるいは両方にくりこまれてしまっているらしい「普遍的な面」^註を問題とし、*langage* という事象総体の中に3つの因子を識別していくべきではないかとも思われる。つまり、*langage* を現実態と可能態という二つの領域に識別し、それぞれの領域において、社会的、個人的、普遍的な三つの因子を識別していくことである。それはともかくとして、ソシユールの *langue* と Chomsky の *competence* の内容を比較する場合、同一の事象についての理解が異っているのか、それともすでに、意味されている事象そのものについて微妙なくいちがいがないかどうか、も考えておく必要があると思う。

註——ソシユールには「これらの *langues* の観察を通して、彼〔言語学者〕は普遍的であるところのもの (D [氏ノート] … 一般的な諸特徴, J [氏ノート]) を、引き出すであろう。その時、諸抽象の総体を手にすることになろう(DJ)。これは *la langue* であろう (D)。 *la langue* はすべての *les langues* に一般的な〈共通な〉事実の総体である。 *la langue* は、異った *langues* の中に人が観察しうところのものである (S)」(Godel, Sources p. 157) のような考えもあり、このような考えは、はたして、*langage* の中に二つの因子を識別するという図式の中でうまく処理できるであろうか。

III

さて、以上の考察は *langue-parole, competence-performance* という名称によってそれぞれ意味されている事象が *langage* の呈する事象総体の中で占め

ている「区画」を明らかにしようとするのであった、ともいえよう。かならずしも明らかにできなかった点もあるが、以上の考察を参考として背景におきつつ、次に *langue*, *competence* の「内容」を比較してみることにしよう。

Chomsky が「ソシュールの *langue* の概念は単に項目の体系的な目録にすぎないとして、これを退け、*langue* ないし *competence* をどう理解するかという点では、むしろこれを生成の諸過程の体系ととらえたフンボルトに帰らなければならない」としていることはすでに見た。たしかにソシュールが、*langue* について記号という項目の目録とするような表現をしていることは否定できない。すでに引用した「個人の脳中に含まれているところの全体、聞かれ且つ口にだしていわれる諸形態とそれらの意味とのたくわえ、これが *langue* である」のごとき表現などは *langue* を項目の目録とソシュールが考えていたのではないかと思わせる。また「*langue* は記号の体系 (*un système de signaux*)」(Godel, *Sources*, p. 54) であるという表現などは、「*langue* を要素の目録と考え、伝統文法ならびにフンボルトの一般言語学の関心の焦点となっていた規則の体系よりもむしろ要素の体系に気持を奪われていたソシュール」という Chomsky の考えを肯定しているかのようである。ところが、すぐ上にひいた「*langue* は記号の体系である (*La langue est un système de signaux*)」という発言は第一回の講義のはじめの方でなされているのであるが、すぐ続けて“*ce qui fait la langue, c'est le rapport qu'établit l'esprit entre ces signaux.*”「*langue* であるところのものは、これらの記号の間に精神が立っている関係である」ともいっているのである。また Chomsky はソシュールについて、伝統文法の関心の焦点となっていた規則の体系よりもむしろ要素の体系に夢中になっている、というわけであるが、しかし、ソシュールは、伝統文法に関して次のようにのべているのである。

「他方、言語学的諸研究〔印欧語比較文法学——引用者〕の創立前に言語 (*langue*) を研究した人々、すなわち伝統的な諸方法によって鼓吹された「文法家達」はどのように行ったのか。奇妙であるが、当面の問題に関して、彼

らの観点は全く非の打ちどころがないことを認めざるを得ない。彼らの研究は彼らが状態を記述しようとしていることを明確に示している。彼らの計画は厳密に共時論的である。したがってポール・ロワイヤルの文法は、ルイ十四世治下のフランス語の状態を記述し、その〔フランス語の状態の〕諸価値を決定しようと試みている。そのために中世の言語 (langue) を必要としない。水平軸から決して離れることなく、忠実にこれを追求している。この方法はしたがって正しい。」(Cours, p. 118) そしてこれに続いて次のようにのべている。「言語学は、歴史にあまりにも大きな場所を与えてきたが、今や、伝統文法の静的な観点に帰らなくてはならない」(Cours, p. 119) そして Chomsky が rules と呼んでいるものを、ソシュールが諸価値 (valeurs) ないし諸状態 (états) と表現しているらしいことも注意する必要があると思う。というのは「共時的な規則 (loi synchronique) とは事柄の状態を確認することなのだ」(Cours, p. 131)〔下点—引用者〕ともいっているからである。はたして Chomsky のソシュール理解は、このような発言をも充分ふまえた上でなされたのであろうか。まず私はこの点をうたがわしく思う。Chomsky は、言語学が要素の目録の研究へと視野をせばめたとし、その誘因のひとつに、こういう限界の中で作業をした比較言語学の劇的な成功をあげている (Current, p. 59)。これは直接には Whitney に関連していわれているのであるが、同箇所「Whitney のように、ソシュールは……」と続いていくところからしても、ソシュールに関してもそう考えていることは明らかである。しかし、ソシュールは「比較言語学の劇的な成功」をまさに問題視したのである。極端に言えば、ソシュールの関心は終始 langue の規則 (a) にむけられていた、ともいえよう。しかし、いきなりこれにとりくむ前に、まず解決されなければならない問題状況があった。それは「比較言語学の劇的な成功」によって langue についてのさまざまな規則 (b) が明らかにされたわけであるが、伝統文法の関心の焦点であった規則 (a) と、この規則 (b) は異なった序列のものであるにもかかわらず、その区別と関係が明晰に識別されていない、という状況である。ソシュールは「事実、言語学は両者をここ数十年の間、混同してきて、その方法の無価

値なことに気付かなかった」(Cours, p. 137) といっている。かくて、ソシュールが、いわば規則 (a) を研究する共時言語学 (linguistique synchronique) と規則 (b) を研究する通時言語学 (linguistique diachronique) を区別したことが、langage の中に 2 つの因子を識別したこととならんで、言語研究の方法史上、画期的な出来事であったことは周知の事実だといつてよいと思う。Godel によればソシュールは、後の区別に気付くはるか前に、synchronie と diachronie の区別を発見していたという (Sources, p. 157)。

このような事実を参考にしながら、あらためて、ソシュールが langue について表現していることを見ていくと、到底、「規則の体系よりも要素の体系に夢中になっている」などとはいえないであろう。たとえば一寸目についてだけでも、「辞書と文法」とが langue を忠実に表現したものだとしている (Cours, p. 32, もっとも p. 38 では langue の存在様式を辞書のコピーが各個人にくばられているというようにいっているが)。また langue をチェスのゲームに比較し、体系と諸規則 (le système et les règles (rules!)) という表現もしている (Cours, p. 43)。また langue の諸規則 (lois de la langue, Cours, p. 106)、「そこ [langue] においては要素が相互に一定の諸規則 (des règles déterminées) にしたがって平衡状態を保っている」(Cours, p. 154)、「共時言語学は、共存する事項を結びつけ、かつ体系を形成している論理的ならびに心理的諸関係を取りあつかうであろう (Cours, p. 140)」また「表現の手段の体系としての langue」(la langue en tant que système de moyens d'expression) のような表現は注目すべきである (Cours, p. 185)。

以上のような表現を、こまかい釈明は抜きにして「変形文法」理論の文脈の中で考えてみると、次のようにでもなろうか。たとえば Chomsky は英語における *Passive* の「変形規則」を NP-Aux-V-NP のような「構造分析」が可能な string $X_1-X_2-X_3-X_4$ を $X_4-X_2+be+en-X_3-by+X_1$ に「構造変化」させること、と定義している (Syntactic Structures, p. 112—なお、この点については、「変形文法」理論の中で、Aspects, p. 132 に記されているようなことが起っているわけであるが、その問題は今は保留にしておきたい)。ソシュールならば、

NP-Aux-V-NP のようなひとつの事項 (A) $X_1-X_2-X_3-X_4$ と、事項 (B) $X_4-X_2+be+en-X_3-by+X_1$ との間にひとつの関係 (rapport) がある、というであろう。また、この二つの事項の間に対立 (opposition) がある、というであろう。またこうした関係・対立を状態 (état) ともいうであろう。そして、こうした関係・対立・状態をこれらの事項の価値 (valeur) ともいうであろう。そして事項 (A) から事項 (B) への「変化」(change) をソシュールは transformation とは表現しないであろう。なぜならば transformation (syntactique) は事項 (A) がこうむるかもしれない歴史的な変化を表現するために使うだろうからである (Cours, p. 132 を参照)。そしてそのかわりに arrangement あるいは agencement と表現するであろう (Cours, pp. 131-2 を参照)。

Chomsky によるとフンボルトは言語 (language) は本質的には「単語のたくわえ」(Vorrath von Wörtern) に加えて「規則の体系」から構成されている、としているという (Current, p. 57)。それならば、「単語のたくわえ」と「規則の体系」とはどのようにかかわっているのでしょうか。Chomsky ならば、「規則の体系」にかかわりなく、「単語のたくわえ」、つまり要素の目録さえ決定できない、とでもいうように両者の関係をとらえるだろう (Current, p. 6 を参照)。ところでソシュールも次のようなことをいっている。「単位 (unité) と文法事実 (fait de grammaire) とは言語的諸対立の働きという同一の一般的事実の異った面を示すための異った名称にすぎない」(Cours, p. 168)。「単位」をいわゆる「単語のたくわえ」と対応させることはまず問題がないだろう。

「文法事実」と「規則の体系」は無縁の概念であろうか。それはともかくとして、かくてソシュールは langue を「記号の体系」ととらえると同時に記号間の関係の総体ともとらえるのである。すなわち「langue を構成し、その働きを司っているものはこの慣用的諸関係の総体である」(Cours, p. 176) とされるのである。くわしい検討は省略しなければならないが、ソシュールは、langue を記号の面から表現するとき、すぐれて système というようである。一方、langue を記号間の関係の面から表現するとき、すぐれて mécanisme というようである。このようにみえてくると、Chomsky が、ソシュールにつ

いて「基本的には langue をそれぞれ文法上の特性をそなえた記号の集合、すなわち単語のような要素、成句、それに多分、ある限られた句型の集合と見なしている」といったあとで、さすがに次のようにつけ加えないわけにはいかなかった事情がうかがいあがってくると思う。すなわち「*mécanisme de la langue* という、ソシュールのどちらかといえばあいまいな概念はそれ以上のものを意味していた可能性があるけれども」(Current, p. 59)。

そこで、この点を更に見ていこう。ソシュールは「かくして、langue というひとつの状態にあっては、すべては関係 (*des rapports*) に基いている」(Cours, p. 170) とした上で、次に、「それら〔関係〕はどのように働くか」(Cours, ib.) を問題にしていくなのである。この関係の働きをこそ、ソシュールは *mécanisme de la langue* と呼んでいるようである。その関係を、働き方の相異によって、二つに分類し、一方を、*rapport syntagmatique*、他方を *rapport associatif* と名付けるわけである。この点に関連して Chomsky は、*modern structural linguistics* は、本質的には分割と分類という操作、ならびに *syntagmatic* かつ *paradigmatic* な分布を記述するというやり方にもとづいている、として、その例としてソシュール、Hjelmslev, Harris などを指摘し、これらの概念が、彼のいう *taxonomic model* の特徴をそなえた生成文法を示唆していることは明瞭だとおべている (Current, p. 53)。そして、その *taxonomic model* は、どの規則も、要素 A は Z-W なる文脈において X なるメンバー(ヴァリエーション)を持っている、という形式になっていると特徴づけることができるという (Current, p. 53)。しかしもし Chomsky が、ソシュールの *rapport syntagmatic* を要素 A と Z-W なる文脈との関係として、一方 *rapport associatif* を Z-W なる文脈においてのみあらわれる(要素 A 以外の)要素 X と要素 A との関係だと解しているとするならば、つまり *rapport syntagmatique*, *rapport associatif* を、それぞれ Chomsky のいう *syntagmatic distribution*, *paradigmatic distribution* のことだと解しているとするならば、前者は一応よいとしても、後者に関してはまさにソシュールの視野をせばめるものといわなくてはならないと思う。たしかに Cours, p. 180 の「かくて、

anma という〔音の〕グループを想像してみると、m という音は、それと
りまいてる音と、syntagmatique な対立〔関係〕にあり、精神が示唆しう
るかぎりのすべての音と associatif な対立〔関係〕にある、つまり

anma

v

d

」のごとき説明は一見、

rapport associatif が Chomsky の paradigmatic distribution を意味してい
るかのようにあるが、しかし、m 音と associatif な関係にあるのは、「精神
が示唆しうるかぎりのすべての音」なのであって、m 音と同じ文脈にあらわ
れうるものも、当然それには含まれているであろうが、それにかぎるよう
な思想をソシュールの中に見いだすことは私にはできない。また Cours,
p. 179 の「我々が《que vous dit-il?》という文を発する瞬間、潜在的な
syntagmatique な型においてひとつの要素を変える、たとえば《que te dit-il?》
——《que nous dit-il?》などのように、そしてこのようにして我々の選択は
代名詞 vous にきまる。かくして欲した点において欲した区別をもたらしな
いものをすべて心の中でのぞくというこの操作において、associatif な諸連関
と syntagmatique な諸型とが二つながら働いているのである」という説明も、
一見要素 A なる vous は、Z-W なる文脈、つまり《que —— dit-il》にお
いて、member X なる te, nous を持っている、という rule の形になおせ
そうであるが、そのようにしてしまうことは、あまりにもソシュールの思想
を狭隘なものにしてしまう。この場合の例をとって、そのほんの一例を示せ
ば、vous, nous は一寸工合が悪いので te を例にとると、要素 te は、同じ
文脈に立ちうる vous, nous などとのみ rapport associatif の関係にあるの
ではない。そこには立ちえない tu とも、vous, nous などにもおとらず、
rapport associatif の関係にある、というのがソシュールの思想であり、けだ
し te がえらばれた場合、「欲した点において欲した区別をもたらしえないもの」
として心の中でのぞき去られたものの中に、tu も含まれていることは当然で
あろう。

無論、te が vous, nous に対して持つ associatif な関係と、te が tu に対して持つ associatif な関係との相異を認識してこれを更に分類していくことは必要であろう。丁度ソシュールが、ラテン語の dominus, domini, dominō などの associatif な関係と、フランス語の enseignement, changement などの associatif な関係との相異を指摘しているように (Cours, p. 174-5)。ソシュールは、langue をこうした rapport syntagmatique と rapport associatif の総体としてとらえた。そのおのおのの中にどのような差異が見出されるかは、ソシュールは課題として後世に残したのだ、ともいえよう（「ここでは、もっとも一般的な諸原理を立てるだけにとどめる (Cours, p. 188 参照)」。しかるに、rapport associatif を Chomsky のいう paradigmatic distribution のみに限ってしまうならば、それ以外の、langue を構成する rapport associatif は視野から欠落することになる。このようにして構築された Chomsky のいう taxonomic model が、strong generative capacity に欠けている (Current, p. 53) のはけだし当然のことであろう。しかし、そのような欠陥を Hjelmslev や Harris に指摘するのはいざ知らず、ソシュールに指摘するのは、明らかに Chomsky の誤りだと思う。

なお念のためにいうと、rapport associatif などの関係をになうものが、いわゆる単語、形態素のみにかぎられるという思想はソシュールの中に見られない。比較的わかりやすいためだと思われるが、単語、形態素をその例として用いるのが普通であるけれども、それをになうものは一般的には terme, signe, unité などといわれ、これらをどう理解するかは、ソシュール解釈の重要な問題点になっている (Godel, Sources, p. 168 以下など参照)。Godel によると、第一回目の講義で、association [rapport associatif] の分析をしたあとで、ソシュールは次のように云ったという (Sources, p. 168)。「我々が単語という unité から出発したのは恣意的だということに注意しよう。同様に文という unité から出発することも我々はできたであろう」。また、ソシュールがいわゆる morphologie と syntaxe の区別を事象そのものに則していないとして、認めない (Cours, p. 185 以下を参照) 点も念頭においておく必要がある。

それならば、一体どこで, rapport associatif を paradigmatic distribution とするような「視野の狭隘化」が起ったのであろうか。この点で, R. S. Wells が rapport associatif [ならびに rapport syntagmatique] についてのべていることはまことに興味深いといわなくてはならない。すこし長いが一部をのぞいてそのまま訳して引用してみよう (“De Saussure’s system of linguistics,” *Word* 3 1947 —ただし M. Joos 編 *Readings in Linguistics* 所載のものによる— p. 6 左欄)。「記号が他の諸記号に対して有する関係はまたしても2種類ある。すなわち associative と syntagmatic なそれである。記号が、先行し、後続し、あるいはそれを含む諸記号に対して、またそれが、syntagm であるならばその中に含まれている諸記号に対しても有する関係が、その syntagmatic な関係である。——中略—— associative な関係は、全く異った種類のものである。すなわち記号は、文法的にそれに似ているか、意味的にそれにむすびついている他の記号を、あるいは音の類似以上の何物によっても関係づけられてない記号 (たとえば enseignement, justement) をさえも思いおこさせることができる。——中略—— この2種類の関係はおたがいにささえあう」として、続けて次のようにのべている。「ソシュールの意図を、現代の術語でいいなすと、どの syntagm (たとえばフランス語の défaire, ラテン語の quadruplex) も同じパターンを有する他の一切の syntagm (たとえばフランス語の décoller, déplacer ...; refaire, contrefaire) を associative に思いおこさせうるし、おのおのの形態素は、それと入れかわって同じパターンを有する syntagm を形成しうるような他の一切の記号と associative に関係づけられている、ということである」(下点——引用者)。ここには、見事といってもよいほど、「ソシュールの意図」が狭隘化されているといえないであろうか。たとえばとして、フランス語の défaire, ラテン語の quadruplex をあげており、これはソシュールが Cours, p. 178 で用いている例であるが、たまたま Wells のように定式化できるような例であるにすぎない。(もっとも、ラテン語の quadruplex と quadraginta を「現代の術語」ではたして「同じパターン」といいうるかどうかが問題であろうし、そのせいでもあろうか、ラテン語の syntagm quadruplex が思いおこ

させうる syntagm の例を Wells はあげていない。しかしソシュールは *quadraginta* もあげている)。たとえば Cours, p. 175 でソシュールがあげている enseignement と enseigner の関係は、Wells のように定式化することはできない。かくて「変形文法」理論の口吻を借りていえば、enseigner の nominalization という問題は、Wells の定式化からは完全に欠落してしまうことになるのである。

それならば、「ソシュールの意図」をこのような「現代の術語」でいいなおすような傾向は、どこでどのようにして生まれ、ひろがったのであろうか。あるいは私の誤りかもしれないが、L. Bloomfield の名著 *Language* の中の次のような個所にその源を求めたい気持が私にはしきりにする。すなわち、「ひとつの形式があらわれうる位置〔複〕がその形式の機能 (function)〔複〕あるいは集合的に機能〔単〕である〔という〕。ある一定の位置を満たしうる一切の形式はそのことによって、ひとつの形式グループ (form-class) を構成する〔という〕」(*Language*, p. 185)。Bloomfield は、諸形式を可能なかぎりの form-class に分類し、かくて、このようなもろもろの form-class と lexicon (*Language*, p. 269) という枠組で、言語の完全な記述に到達しようとする。たしかに、「形式の機能」を「その形式のあらわれうる位置」によって定義するような、まことに明晰な、mechanistic な方法が、言語研究史において果たした大きな役割はこれを見すごすことはできない。しかし一見、これに類するほどの見事な、mechanistic な操作をほどこすことができない点に関しては、故意に言語学の対象ではないとしたり、問題意識を欠落させてしまうような傾向が生じたことも周知の事実である。先にあげた、Wells のソシュール理解もその一例とすることができよう。たとえば、Bloomfield においても、「英語では、我々は 2 つの favorite sentence-form を有する」として、actor-action construction と command をあげているが (*Language*, p. 172)、その両者の関係を問うような姿勢は、ないといえはいきすぎであろうがおそろしく弛緩している。form-class と lexicon という枠組でこの 2 つを記述しようとするれば、一応可能であろうが、記述の冗慢さは避けられないであろうし(この二つは多くの特徴を共有しているから)、また密接な関係 (rapport) があるにもかかわらず

らず、その点がうやむやのままおかれることになるから、それぞれの記述に適切さが欠けることになるろう。たしかに Bloomfield を徹底させると (Bloomfield の持っている柔軟さは一応無視して)、^註 Chomsky のいう taxonomic model に行きつくであろう。そして、それは weak generative capacity はもつかもしれないが、strong generative capacity に欠けることになるであろう。

註——この点に関連してだと思われるが、Chomsky が, Syntactic Structures の序文 (p. 5) でのべている事も重要であることは認めなければならない。

にもかかわらず、このような動向の責任をソシュールその人に帰することが誤りであることはすでに明らかにしえたのではないかと思う。また、modern structural linguistics かあるいは traditional grammar ならびにフンボルトか式のいささか鬼面人を驚かす体の選択肢がはたして正しいものであるかどうか、Chomsky の力説にもかかわらず、はなはだうたがわしい。たとえば、modern structural linguistics は、言語の「創造的な」面に関心をむけて、これを記述しようとはしないというわけであるが、Bloomfield, Language, p. 275 の記述などは、それにいたるまでの Bloomfield の意図がはっきり、言語の「創造的な」面に関心をむけて、これを記述しようとしていることを明らかに示しているといえよう。また、Hockett, Harris などに、「話し手がその言語に関して有する能力と知識を具体的に表現するような生成上の規則の体系を提示するという問題」に立ちむかうところみがあり、それらの研究に触発されて、彼の理論が発展したという面もあるのだから、まことに奇怪な発言といわなければならない。

ソシュールは若冠 20 歳頃、印欧祖語の古層における laryngales の存在を予見する理論を発表した。一般には認められるところとはならなかったが、今世紀初頭のヒツタイト語の解読を契機に、ほぼ 50 年後 J. Kurylowicz, E. Benveniste 等によって、その理論が展開されて今日にいたっている事は周知の事実である。Cours が発表されたのは 1916 年である。その langue の総体に関する彼の構想はアメリカにおいても大きな影響を与えた一方、特殊アメリカ的な狭隘化もこうむっていたが、同じようにほぼ 50 年後、ただし

この場合はそれと知られることなく、その理論が展開されている、というのは私の思いすごしであろうか。私にはそのような *analogia* (*mutatis mutandis*)^註があるような気がしてならないのである。

註——小論は、私が「変形文法」理論そのものについてはその全体を理想化しているような印象をあるいは与えかねないと思う。しかし、その全体を正しく理解したいとは思っているが、理想化しているのではないことは、蛇足ながら附記しておきたい。小論は、そのような理解のひとつの試みでもある。そして、たとえば「文が形成される諸原理にかかわりなしには、音素の目録といえども決定できない」のごとき考えには、きわめて疑わしい気持をいだいている。しかしその検討は別の作業になろう。

(1971.1.31)